

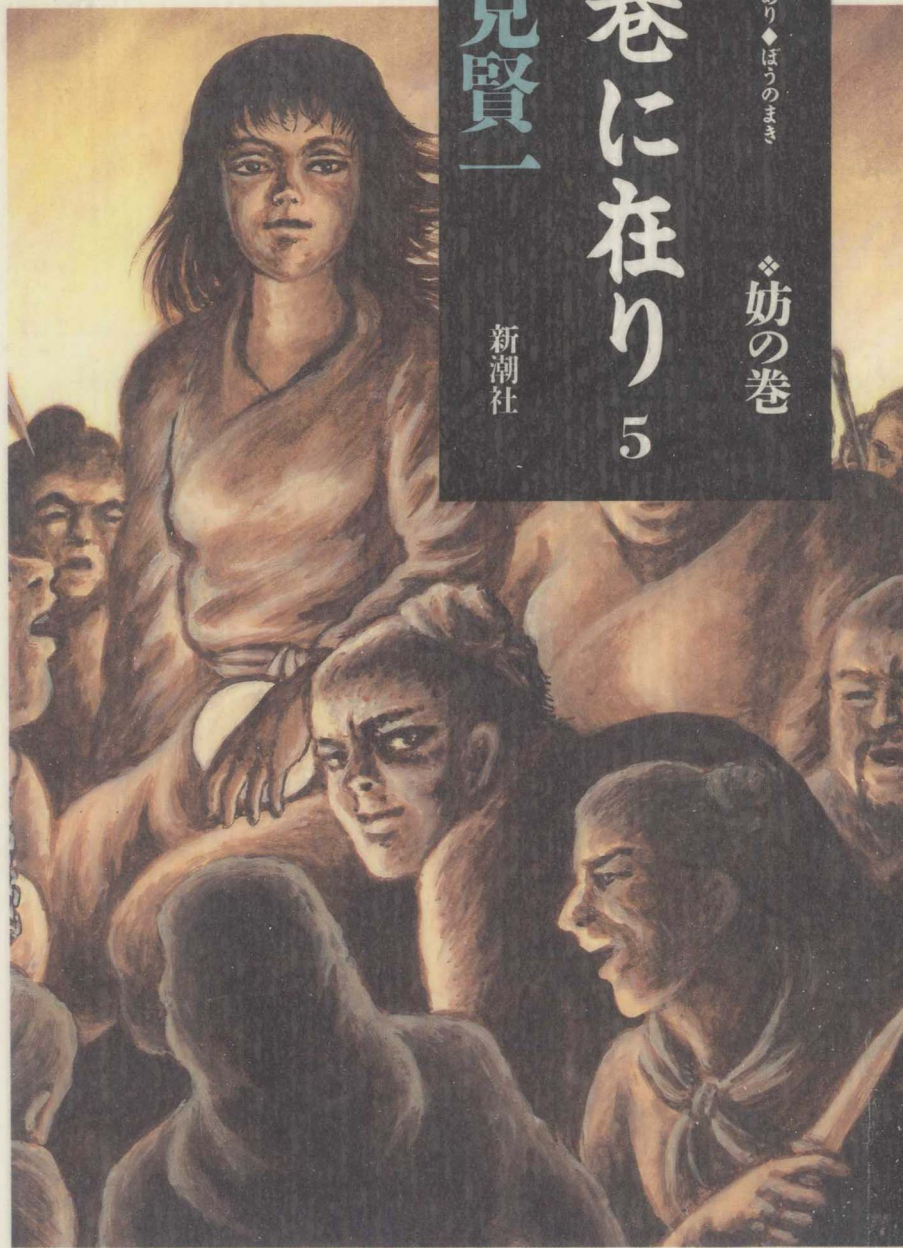
ろっこうにあり◆ぼつのまき

❖ 妨の巻

陋巷に在り 5

酒見賢一

新潮社



ろうこうにあり◆ほうのまき

◆妨の巻

陋巷に在り

酒見賢一

新潮社

陋巷ろうこうに在り 5 妨ばうの巻まき

一九九五年八月二〇日発行
一九九五年九月二五日二刷

著者 酒見賢一さみけんいち

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号一六二

電話（編集部）03—三三六六—五四二一

（読者係）03—三三六六—五一二一

振替 〇〇—一四〇—五—八〇八

印刷 大日本印刷株式会社

製本 株式会社大進堂

価格はカバーに表示してあります。



© Kenichi Sakemi 1995,
Printed in Japan

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り）
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

ISBN4-10-375108-8 C0093

陋巷に在り

5 妨の巻
目次



費城
(二)

98

費城
(一)

74

鏡壺
(三)

43

鏡壺^{きょうこ}
(一)

7



騷擾そうじょう
(一)

127

騷擾
(二)

155

局面
(一)

188

局面
(二)

219



装画・カット 諸星大二郎

装幀 新潮社装幀室

陋巷ろうこう
に在あり

5
妨ざう
の巻

妨

声符は方。

方は呪禁にして防の意がある。「説文」一二下に

「害するなり」とあり、「六書故」に「女人は他の進むを妨ぐるな

り」とするが、巫女をもつて妨遏とした、古代の呪的な方法のなご

りであろう。方は架屍、曷は屍体を用いて呪禁とする方法であつた。

方に従う字のうちには、そのような古い呪的方法のなごりを残して

いるものがある。

——白川静「字統」より

鏡蠱（一）



五六はここ数日、生きた心地がしなかったと言っている。それほど好の鬼没は五六を悩ませた。五六のような修練を積んだ男の目を、そう簡単に胡麻化したりは出来ない。その上、姿が掻き消えるなどということになると、それは常人のわざでは有り得ない。

好は、常人のはずであった。たとえ蠱に憑かれてるにしろ、本人は普通の人間であるはずだ。それでも好は難なく抜けるのである。その度に自信をぐらつかされ、五六は齒軋りしたくなる思いをしている。

五六は好の家の出入口を、やや離れた場所ながら、はつきり監視できる位置に潜んで見張っている。家の中にいたはずの好は、いつの間にか、外出してしまっていた。無論、白昼堂々である。

家の中から好の気配が無くなれば、すぐに分かる。家の中を覗きにゆくとやはりいなくなっている。気付いた五六は慌てて連れ戻しに走らねばならなかった。いまのところはかろうじて大事に至る前に発見し、連れ戻せていた。

抜け出した好は、たいてい市場周辺の繁華街か、その裏路地に向かう。これだけは何かに導かれるように変化がなかった。だから五六は途中で捕まえることが出来ている。好の行き先が毎回変更されていたとすれば、どうなっていたか分からない。

これが日に数度も繰り返された。

好自身は自分がどうやって家を抜け出すのかも覚えていなかった。なべて夢遊の状態ですは起きていた。

五六が追い付いて好の肩を捕らえると、決まってうつろな、また色^色滲む目をまたたかせて振り返る。まるで別人であった。顔付きも身体付きまで変化しているのではと思われるほど顕著な変身である。

「あれまあ、兄^兄哥さん、あたしに御用……？」

と媚^びをつかつて言う時もある。五六はその度に腰から背中に戦慄的な衝動が起きるのを圧殺せねばならなかった。好はそれほど真に迫った媚^{めい}疊を示した。

五六は尼丘^{じまやう}で仕込まれた活法に従って、経絡^{けいらく}穴を突いて気付けをほどこした。好はたいていはそれで正気を取り戻した。正気に戻った途端に好はいつもの陋巷^{ろうきやう}の好になった。それはいいのだが、好には知らぬうちに家を出ることがひどくショックなのであろう。泣きべそをかかんばかりの悲しそうな様子を見せる。

そもそも、五六は女嫌いであり、女々^{めめ}しいことが大嫌いだった。好というのは珍しく女々しくない娘だと思っていたのが、ひどい女々しさを見せるのである。これがたまらないのである。五六はともすれば悲しがる好を殴^うりつけたくなった。

「あ、また、抜け出したのね」

と好は申し訳なさそうにうつむいた。

「五六さん、ごめんなさい」

五六は渋い面つきで何も言わなかった。好に、

「気にすんな」

と言う前に、おのれの無力に対して腹が立って仕方がないということもある。

顔^{がんし}氏術者五六の目は節穴ではないのである。これと目を付けた者を見失うなどこれまで一度もなかった。しかし、今回は好が家の中から外に出るのを見つけることが出来ないという、何とも恥すべき失態を重ねている。

今度こそ何事も見逃すまいと、目を皿のようにして見張った。それでもどうやって好が家を抜け出すのか分からなかった。五六は己の眼力に自信を失うと同時に、己の頭がどうかしているのではないのかも疑った。

好がどうやって五六の監視下から抜け出していたのか、その一法は二日後に見破ることが出来た。それも五六が実力で看破したのではなかった。

種を明かせば単純なことであった。好の母が籠をかかえて外に出た時、好は一緒に外に出ていたのである。ただし、好は影のように寄り添って外に出ていた。五六の位置から見ると好は母親の姿にびたりと重なってしまっていて、二人の人間が動いているとは思ひもよらなかった。

しかし、これは一見易しいようだがかなり難しい術である。好も背丈が伸びている。今では母親よりほんの少し低いくらいであり、体格もあまり変わらない。ある角度に対してほぼ同じ体型の人間が寸分も違わず重なって動くことが、どれほど難しいかは実際に試してみればすぐに分かる。

まず母親が戸口を出て、通りに出てゆき、五六の視界から消えるまで、好と母の動作とはぴたりと一致していなければならない。洗い物にゆく母親のことなどすぐに注意の外となる。盲点であろう。この時、好は母親のわずかの身動きも先に察して合わせていなければならない。指一本

でも母親のシルエットからはみ出してしまえば、重なっていることが判明してしまい、この術は互解する。

優倡の雑技の中には、二人の人間が互いに鏡に写り合つてでもいるかのよう同じ動作を演じるといふものがある。今ならば二人組のバントマイムというイメージであり、高等技術と言えよう。これとてよほど息の合つたコンビが稽古を重ねてようやく実現する芸なのである。好の使つた隠し身はこの応用としても、その巧みさは異常に過ぎる。

このわざで好は何度か五六をたばかつてきた。おそらく母親の陰だけでなく戸口を出入りする父親や妹弟、また訪ねてきた近所の者の陰も使つていたであろう。誰の陰に入ろうと体の動きをびたりと重ねるのである。生半可な芸ではなかった。五六が見抜けなかったのも無理はない。

氣付くことが出来たのは、まったくの偶然によつてであつた。近所の子供が走つてきて好の母にぶつかつたのである。この事故がなければ好のトリックを見破るのはまだ先のことになつたろう。

驚くべきことだが、好は子供に当たられて偶発的によろめいた母親にも素早く反応して同じく身を合わせようとした。瞬間、母親の身体の線からほんの少しはみ出した別の線を見ることが出来た。並みの者ならば見逃していたであらうわずかな線である。

(や！)

五六は声をあげそうになつた。すぐに子細を覺つた。呆れるほど単純な隠し身ではないか。種が明らかになつた後でも五六はまだ納得出来ぬところがあつた。

五六がいる位置の問題がある。巧妙に影に身をいれるのは分かつたが、それは、五六の位置から見ている限りにおいて、好が完全に隠れおおせるのである。同時に別な方向からの監視があれ

ば当然ながら容易に発見されてしまう。

好は母親の皮をかぶっているわけではないのである。あくまで五六の位置からの視界の角度内で、母親の陰にはいれるように動いていた。少しでもずれがあれば、好が母親に張りつくように動いているところは写真のぶれのように見えてしまうに違いない。

つまり好は五六の位置を知っている。五六の隠れている場所を正確に掴んでいて、それに合わせて母親を盾にする角度を決めていた。五六は定期的に隠れる場所を変えていたから、好は毎回同じ側に隠れていたのではない。この点が判然としない。五六には好がどのようなようにして五六の位置を知るのがさっぱり分からなかった。術で知る以上の何らかのわざがあると思えないのである。

五六にはこの宿題を検討する暇も与えられなかった。それから人が出入りする時には移動しつつ監視するようにする。何度か現場を押さえることが出来た。

好は、または好に憑いた何者かは、五六に人の影を利用して抜ける芸を見破られたことを察知するや、その術の使用を止めた。すなわち別な術を使い始めた。

好は今度は人の出入りを利用せず、当然、出入口を通らずに、家の中から煙のように消えてしまふようになった。無論、いかなる法を使っているのかまったく分からない。これに五六は呆れるより頭を抱えてしまった。

戸口は常に五六の監視下にあり、そこを通過して抜け出せるはずはない。時に牖まどや戸口から家中を覗いて、

(坐っているな)

と確認して、また視線を戸口に注いでいる。そのうち、ふと気が付くと好の気配が消えている。覗きにゆくと好の姿は忽然と消え失せていた。この術の種こそ、五六は敵に土下座してでも教え

を乞いたかった。

（壁を通り抜けるのかよ……）

案ずるにそうするかあるまい。気持ちの悪い考えであった。

五六は仕方なく、土牆どじょうの陰や屋根の上に隠れるのをやめて、路地に出た。物乞いの真似などを歩いてみる。好の家の前を起点に、常に家の中を覗き込めるように往来し、時には家の前に坐り込んだ。出来れば家の中に坐り込みたいところである。

五六がじつと家の中に視線を注いでいる時は好は消えなかった。だが、少々立って往って戻ると好は抜けていた。歩きながらも好の家の戸口から目をはなさぬようにしているのは無論のことである。いつの間にか、もはや、いなかった。慌てて視線で追い捜すと好は既に数町先を歩いているのである。

鳥類のような広域の視界を持たないから、一瞬くらいは戸口から目を移すこともある。それでも一瞬のことであり、一人の人間が戸口から出て走り去るような時間ではない。しかも好が五六の前方を歩いている時もあった。五六は誰ともすれ違ってもないのだ。

なんとも不可解な術であった。好の家の壁や床に抜け穴のような大それた仕掛けはありそうもない。仮にあったとしても一瞬の間にそれを通して五六の数町先に現れられるかといえば、無理と言うしかない。

（お手あげだな）

五六はプライドの高い男であるが、こうも鮮やかに術を決められ続ければ、素直に参ってみせるしかなかった。現実には柔軟に対応するものである。謙虚に考えれば返し技も意外に早く見つかものだ。

かりに謎解きをしておけば、この第二の術は正当な術ではあるまい。幻術であり、実体のないものである。多分、好は、第一の術の時のような作為を行わず、五六の目の前を堂々と通って出ていった。それが五六に見えなかっただけのことである。

ここ何日も五六は好の監視に神経を集中させ、それでも、何度も抜け出されてしまった。それは五六をお手上げと思わせるまで繰り返された。ここに仕掛けどころが生まれる。おそらく第一の術に繰り返し欺かれて、また連れ戻すことを繰り返しているうちに好を介して五六にも蠱が及んでいったものだ。練達の術者として反復して心理を揺さぶられていては目への自信がだんだんと疑わしくなっていく。蠱術はそこを捕らえて引きずり回すのである。暗示とまではゆかないが、慣れか、心理的錯覚のようなものが五六の目を眩んだ状態にしまっているのだであろう。

こうなれば好が抜け出す度に悪循環が起きる。蟻地獄に落ちこんだようなものだ。自力で術を返すのはほぼ不可能に近い。

巫術まじなとしては本物の壁抜けよりも高等技術に入れられるであろう。一定の対象を一時的にだが見え隠れしてしまう術の厄介さはくどくどと説明するまでもあるまい。

五六は現実的な男である。どんな法で抜けるのかを見破るのは後に残してよい。とにかく要は好の脱出を阻止出来ればよいのである。監視の法も工夫をこらしている。だが所詮は一人の監視である。好には通用しなかった。しかし、今の五六には監視の仕方をいろいろに試すくらいしか考えが浮かばなかった。

単純な話、五六が好の家に上がり込み、首に綱でもつけて番をするのが最良の法なのである。むろんのこと、まったくの他人の五六が好の家に上がり込むわけにもいくまい。顔回がいかいたちに知られてしまうのもいやだった。

(それなら、あいつを攫^{さら}つてどこかの小屋に閉じ込めて見張つてやるかね……)

やや不穩な案が頭に浮かんた。すると、途端に、ぶくりと熱く泡だつものが、胸のあたりに生じた。得体の知れない感情がせり上がってくる。

(まずい)

何か心の奥の鬚^{ひげ}を羽毛でなぞられるような奇怪な、それでいて不快でない引きつけてやまぬ感触が伴った。それを思い続ければ溺れてしまふであらう。

五六はすぐに打ち払った。心をびたりと閉めた。しかし、すぐに、

(なぜまずい?)

と疑う声が上がった。好を拉^ち致するのは方便である。一つ屋根の下で見張るのが最も確實ではないか。

(べつにまずくはない。小娘が数日家をあけても親どもはとくに騒ぐまい)
補強する意見はするするとのぼる。

(まずいものはまずいのだ!)

五六の意思はそれを遠ざけようとする。

(まずくはない。この手しかない)

声は自棄^{やけ}になった。心に叩き沈めてしまふにはあまりに強い誘惑がある。

五六は洞察してしまい。その疑う声こそ、蠱^いの浸透、増長を示すものである。葛藤が起きるうちならばまだよい。心の中には思いに邪を生じさせるものが大勢潜んでいる。多くは鬼神が嫌がるものである。五六は儒者である。それに克^かたねばならない。

好と五六の我慢比べの様相を呈している。ただし、我慢を強いられているのは一方的に五六の